環海異聞

十二

内閣文庫
和書
三五一九五
一六
八五函
八

内閣文庫
番號 和 35195
冊數 16(13)
函號 185 107

国立公文書館
National Archives of Japan

編纂史料備用典籍

環海異聞 巻之十二

本船出帆 并 帰朝洋中之記

十四日十六日 昨日海上法事の用意悉く調ひて出帆す 已後海のおとなれども二日さらなる物なし 物すさまじ 沖へ出るよ 浪ひたのみなる方へ走る事 此事霧北ゆくなり

同十八日 ダンツケとゝふ國の海上を過くゆ所今

全く海なりといふ

拙者は海和蘭より オストセイロ島へし

都より湾へ川続き有之候めの間ハ岩多く

めしなりしかも地名を保セスして勿論へし

カナスメより 武百里の海路を経て七月昌

比と呼へてダンツケと云ふ國也 コツペイカワと云

所ふ船を泊む

此所滞留中 荷物並ニ 和甲間所の仕切

ふ出来ふまとり

北和地方より の出港ハ 拙者ハ此所の岬

より向地スウエイツケと云ふの海岸ニハ 蝦夷

ムカヒアイ

地方の漁戸多て 大抵拙者ハ

道へて居候 拙者ハ スウエイツケの箱夷

ふとこ[illegible]ハ 魯西亜の

新旗の國也 ゆえ

府下武里ハ方 拙人居家作し 建れと

又ゆ京造り街道及寺塔の新もペトルブルカ
ヨ多事なる紀拓ヨ又ゆ男女容姿(スカタカガリ)し京回
しき拓あり但神(カム)ゆハ少し変ら拓ども
芝帝滞留中ハ使臣上達しゆヨ人京を信
多て居り旦那母御ゆ不北煙滑を不瑞
境へ行ける見ハ何為なりと疑しゆれて
他境へ船(フネ)を泊めゆヨハ人質をとられ又煙滑
を流し動ゆ大法也とそり

此度新日滞留士帆の京ハ去れ為貿易掛号
を以て渝盟せりとそり
此所ゆ警師を人面師を人京紀セそり
太平京ハ上境し府下を一見せり（此男船を皇ゆて居ハ皆境へ）
上カ見ようとなる高氣
日変ゆて雨ゆを恐ゆとゆ
船ヨのこ居まり　かの京ハ
曾西亜人ハ船ゆ境へ度と出入しそり
按タンツケハ京那馬(デカ)兒加(ルカ)なり其都府をコツペン
ハーガ」とりゆ此府をかすゆハ書て地方を

新てるまんとゝ又ゆ「コツペガワ」ハ「コンペンハーガ」
の特音とゆも「ダンス」ハ「デチニル」ハ旧名なり「コツペン
ハーガ」ハ大地の東に在る「ゼイランド」といふ島の東北
海をこあり「ツンド」といふ狭き海峡ありて雪際亜国
の地とゝ対す詳この地図地誌に
載す和蘭漂流記に詳なり

旧九月七日　コツペガワ出船ゆ　大洋一切ッ
海中ハ暗礁多き和なりとて船沈没の危
険のやうすゆ
八月朔日二日　アンゲリといふ国の海辺を通
船も

取中海とて字永一種あり　これ和名ヒ
て石火矢のかゝてゐるゝと名つる類なり
ゆ方ハ長さ五六寸ばかりなる石火矢を
石筒字永不字ヒ富ヒ　ヒ　と呼ぶ漕船
多く使用レサノツト舟脇ヒ合一何船ヒて
いつくのもゝを向ーむカベタン舟櫓ゆ
発ヒ升ヒループル名いふて声音をきゝ遠き所を
知ルとてループルと云ひ方云何といひ
をいてるゝとアセーハ何船ゆれハ我ゆ

船を問て石火矢を打免しやと彼船より
答ふこれハアンゲリの軍船なりと船ハ何方
の仕出しまて何国の用ありてこゝ来る
よやといふそハ魯西亜国より日本海の
使節船なり何の反ありて斯る石火矢
を打免しや子細承んと責め問けまして
船の者共驚き騒ぎて船を暗(クラキ)縁れて
遠へて他国の軍船なりとハかくの振也いる

せしハ高い巖息の如く恐れ入りて船の帆を
下ケひとすゝ泥を分し遠て沖拵載せ
乗りて其飛を除(ツヒヤリ)す仕舞ハ申しくれを
交ひうすめ何の掛合よや彼人とつらゝ有人
石異しアンゲリ船一条掛りしう本船を
アンゲリの西北某ハ遷まて船を上ケ船を
和ら出すと待居へしと船中沿岸人(ナカ)
お問れ彼船よてアンゲリの都下を使き

一紙左ヨリ
は一事ゆ何るる事とやと船中此人と易船
もるにハラシツースケ帰郷察（フランス）といふ出とアンゲリ
國と無度義あり近此ハランツースケ數軍
りれ又寄セ来るもあるいきなと軍船を
備へ警固セー祇よの所船中通行
セーれハランツースケ船の寄セ来るるんと怪り
てかくの振舞ーるるとと見ル彼節彼の都
ロンドン
名一下を到ているるつ節来るるやと中せし
本船ハ使節の命交ーとくアンゲリ國の内某と
以港ル船と寄セ使節の降り到るを待交く
は不大港にて寄船も無程見くるハランツースケ
より奈元りしとて彼寄船をも多くあるか
あるき到りり
港の毎岩石史矢駱く仕急海へ到りり三
階ル櫓ある番船もあり

は而も水戸彰食物等を携へ入る以下舟とゝゝ
ふハ何方までも携へ給ふ
携へ加へ給ふ
独りアンゲリヤ漢(アンゲリヤ)人利亜(リア)は方ゝてゝ
イギリスなり嶋國なれとも世ゝ名誉の
誉あり都府を籠(ロンドン)敵とゝ西国米魯西
亜國ハ降参しけるゝあり全くを
屬せしとゝいへとも猶ゝ警戒のるゝしとゝ
夫れは彼の豪勇を深く警るゝとゝ

使節ハ兵部城(ミヤコ)を到りいとれ拝ゝるゝ
は出地ゝ拝ゝ弾ゝ船を乗せ一港の名を
定ゝ出ゝす漂客(ヒヨウキヤク)ゝ世界宮海路朱線を慈園
海名「ハムト」海原(ロンドン)の名を)ゝ朱点あり又を西南
路めの一朱点ハ「サノツト」部ゝ初ゝて朱線を引ゝ
今ゝ点ゝ船を出ゝて点ゝ「サノツト」部ゝ初ゝんとゝて上陸しゝる所ゝ
「ハムト」とゝ見ゝ此地ゝ朱線を引ゝ漂ハ
名ゝハ「ハルムート」又「ハルモウト」ゝ称ゝ芝浦(シバウラ)亜(ア)利ノ内
「コルンワル」州の一城地ゝ称ゝて世業ゝ大港なり
都府鑑版(ヘトルブルカ)の世界図 名ゝ方ゝて方図四枚ゝ図ゝ
ゝる物あゝり共ゝ 左右武面ゝ枝

所望と称して右一点ら方図のあり海路
の朱線をひかるる点ハ長崎帰帆中自然の往人
漂流するいふ所ハ船舶不分地名を求めるとと
いへども点を画然ひかる沿路花紙(ムチウ)を画
を画沿の海路を記し与ふ一とて已往たる朱
引して給わり此偽集参考のためとて長崎
ニ示し下しかつ同て点を検閲(アラハセ)しておる原書
を模写せしめ地名号を和解し朱線の海

路をも備せ写して横写巻幅となせるを朱線
の筆ハ第ニハ彼出字もて意く日益を記す者ニ点を
模して写せり太原書模本のかかる一幅の地
図を作りを海路朱線日暦のことを記せるを
解しるるを添て上るるとなり如
此図及細考和解ハ日天素よて考定する所と
望田考ら向氏ニ命せられ考る所といふ
抑此朱線日暦の記ニ由れハ漂流等暗記
しるるを大ニ異なり漂流等いふ所ハ

もとより滞泊する時泥乃ち彼人来るあの
ぬ私中行路日これ泥事なれば先西洋と
すべきもの也なるアンゲリ以下の記聞を
これと對按して説弦乃ち以記して
実況を為るなれば

以朱線日暦アンゲリの説より我七湾の津より出ると
を泥しなほ出ペトルブルクよりアンゲリとの日並に欠て時より
是はアンゲリとの海上に出て直航の熟語にて内洋
ともいふべきなるべしと思ふる琉球巴洲の人まで
飯海と者とする石万出直航の海路に引線せる品説
影くあり以なの物も按ずるに実測せるものなるべし

七湾澤发より北和解書上に彼年暦一千
八百三年八月十一日ペトルブルグを乗船すられ彼の
年月ふて我享和三年
癸亥六月廿四日あるとこれ漂客等ハ亥の年
六月十二日と是に生れりこ主彼と此と年暦
月日の数も相違せるゆへかの差へあり
是きも又是遭ふてもなるやなれども能
故府よりアンゲリとの生線日暦を欠きれハ
説をとるハ按なし

アンゲリ出帆彼國一ヶ月八百磅三年九月廿
三日　我癸亥八月二日ニあたる　ふれうり彼ヶ記すの日益
を拔〳〵て我日曆ニあて試む反ニ源客
号暗記の紀伊とお達すられ以下の
紀聞日並ハ漂民ニ一不を問とし朱
線日記ニ合考するものを用とるすの意ニて
其意徼（セウ）を示んとする也

同十二三日比　使節以部の司事お御ハ謁ふて
北濱ハ来品帝本船出帆す
海孫記を掲するニ出帆九月廿三日とあり
我癸亥八月八日ニあたる漂客暗記ハ巳刻の
差ふる地名海孫来線ハ不ふり打弛む
お帆後次第ニ南ニ向ふ洋中巳方魚山の形一白
見へ〳〵ぬ一初九日夜の方ヨガランツケ阿蘭陀を
とハすりり

九月三日沢カナリヤとゆう港に船を泊む

海路記を掲するに彼十月九日カナリア港の内へツロ岩と云所に碇泊す碇泊船也入日数七日みて十六日和蘭と云西洋紀元彼十月九日ハ我八月廿三日なり即清国ハ廿四日なり

海路凡そ五日

掲ゲ此亜剌利加大洲に属す西洋の諸島かなりヤ即亜墨利加を以て和蘭に命す明人澤所謂福寓これなり船をとゝめ清国にて測量を為すなり

とゆうべツロとそを一也原字忽々のこと是まで再び原字の海路朱線と熟読するにカナリアにて船を泊さる岩の名ハテナリフ即テネリフ島にてべツロ岩とハあらずすなわち清ゆうにテネリフ即加那里亜路の西にて和蘭人に岩をゆうて和度とする而之に岩ゝ西の方に西和度線のことゝ云べし岩の名あり漢ゝ字岩と後に岩ハ博京察人の和度となす而之曾西亜人も博京察人の制に倣てに後岩をいて和度とせるこ

海上日暦政選巴洲ゝ亜剌利加洲に係る

九月廿三日出船　八月八日　彼日九月日　我日月九日

彼 同廿五日　　我 同十日　　彼 同廿六日　　我 同十一日
〃 同廿七日　　〃 同十二日　　〃 同廿八日　　〃 同十三日
〃 同廿九日　　〃 同十四日　　〃 同三十日　　〃 同十五日
〃 十月一日　　〃 同十六日　　〃 同二日　　〃 同十七日
〃 同三日　　〃 同十八日　　〃 同四日　　〃 同十九日
〃 同五日　　〃 同廿日　　〃 同六日　　〃 同廿一日
〃 同七日　　〃 同廿二日　　〃 同八日　　〃 同廿三日
〃 同九日　　〃 同廿四日

〃 数十六日ヨリ　カナリヤ　ニハ我廿五日ヨリ　廿日ヨリ　この日六日帰船

此島ハイシパン（イスパニヤ領地）の領所なりとて此島は洗小島多く此湊沖清ケて海面一路の大サ我九州程ありと見る路の中ニ山見へ此山ハ丸て服地なり土人ハ褐（メカ）色にて男子ハ鼻門ニ穴ヲ明て黒人（ムラカラ）ニ似て黒色なり一説ハ磯切り也船の数計数多いふ人皆くん迫れるハ此地ハ日本と同一節にて毫も隔日相なりとい

掲げ投信一ヶ

此節といへども餘の大なる船の品級ハ今まで渡ル人も是
の品をもて船中へ賣ニ来る

蒲萄　形大なる世品鬱金　蒲萄酒
是まる品のよ

拙ニカナリアウミ井（酒）ンとて世ニ名高し上好の蒲萄
是まる品なるし又カナリーセホーゲル我邦にて
カナリーヤといふ名産なるしけ地の名産なりとそ

柚　梨　檜（クヽ）　香橙（クヽンホ）　林檎　葱

ボタンナ　のめきも　拙ニけ品ニ年中あるし

家　鶏　野牛（ヤギ）　鷺（アヒル）　けが猪ニ産物多し

船中ニて人の諸品を求め皆ニ引ひしら船ニて買
入ル

第五を船ハ場ハ船の人ニ上陸出入ル
太十郎ハ一人上陸せ一根ハ見申
人の屋を第のあ一る物をけ所ニて求め船ニ載
す探ニき物と思ひを為ても見ず差と異きし
時急く偏ニのぞきてるるハ全く人の犯罪也

抽ヲ沐仏(イブツ)命ヲ[illegible]設ケ詳ニス

以地面金三角形ヲ為ルヲ見テリ

出帆の節為中より役人と見るもの右古人

羅紗の服着西亜人の服と大抵三角帽を冠り其衣節の冠

口〜〜を形不見用ヲ見るより

帽ヲ脱ぎ礼ス 足造りヲ来る 抽ヲこれ伊斯巴(イスパニア)係亜人 碗を

引きあけ出帆せんとする時彼岸の方ヲ向て空砲(カラテッポウ)

砲を打てり応れ礼帆ヲ造り礼也とそ

右加那里亜(カナリア)諸島のみなを[illegible]設ケ

同十日 沢 カナリヤ出帆

抽ヲ海路記ヲ彼十月十六日カナリア出帆これ

我九月一日と見へたり 已下亜弗利加(アフリカ)海より亜墨利加(アメリカ)洲ヲ経て海程日層

彼十月十七日 我九月二日 彼十月十八日 我九月三日

以下彼十月三十日 我十月十五日並合す

彼十月三十一日 我九月十六日 彼十月の日並ハ三十一日定数とす

彼十一月一日 我九月十七日 彼十一月二日 我九月十八日

より以下彼十一月十二日 和九月廿六日迄月並合す

図を換する之我六月九日之の月八源家寄寄ら
いと多風るきをいて る船の都る多海上多之や
山色太はを九は月切り船子ニて一日こと
の里船を出て矩し

彼十一月十三日　我九月九日　彼十一月十四日　我十月一日
ちを下彼十一月廿九日　我十月十六日之日並合す
拝彼十一月廿九日　我十月十六日之夜のの日
ブラシリーの之カテリナ島着彼翌一子

八百零四年二月七日我同年十二月廿六日
とこ之上陸為と日数九十七時り也
出私已彼三巳月八嵩之の月を乗り面りしう其
彼八島八一向見へを山岸沖風吹き私八巳午の
方之走れり是ちり数日沖へ走りれ八巳ありハ
風都之ちり是乱極めて酷しく却こハ雷雨を
あり海之入りても是無き是一き海上之雨れり其
此世界の出中一番りしとて私中祝儀あり方至

大王ハ拍手のせられを而ヲエクワトルといひ奇り
使節日日本出帆の時も
亦五ヒ拍手と唱ひ奇りと

拍手エクワトルと羅甸語にて赤道の事也
ハ而亜弗利加海に属す一海路泥を按
する二赤道を五下を通ル此ハ波十一月
十四日より十五日の間我十月一日より日二日
迄の間と見ゆ

毎師（カベミン）我〳〵語るハ加那里（カナリ）亜（ア）墨利加を
の海上ハ世界第一の平穏なる而して印エクワトル
北下なりといふ年中ハ而ハ風も穏にて波穏
なる而之を過ぎ一日も荒れハ風出るなり各ハケ場の
而へ来るハ不思議のなりといふ過しといひ奇き如
急風穏なる故却て船速く走る大に帆柱損
破せり
又イワレヒヨータロイチといふ人強り居ハエクワトルの
下ハ海水高ぶりぬるの地なる里数を測ふるも

仕方にて如此筋なれば動あるかぎり地球の
うへを家根小屋一も北へも沙道へ行なり夫ゆへ星
数もたくさんにみえたとへば北極星七曜なるよりは
小風あるといふ極なる陸もあるゆへ北極星みえぬ所
雲の話解
此意なり南ハ一ツ星北極星七曜なるよりはやうな
ありし故我〻ハ雲の多き陸なり合ひなり赤道下
を通り過きて暖き方より船を漕ぎ行き目

続きてそをとるなり何にても白の紙なりしやうも留めず双方
なり船の小旗を振り合せて通り過きなり
沖を走る時海の色変〻なる所二三日通り走り
紅脂に似て黒くなりしなりとび色なるいろべ〻を掬ひて
見るに上へあげても同色なりして黒ふかナリやうな
南アメリカ国の内ハ海にうとくゆ
所に南アメリカといふ所ハ紙をうしをもへ近行ッて居
ひ次第に繁盛の国なり然とある所ハ紙中毎日ある路なり

十一月十日ニ　南アメリカ（墨利加）北岡のこと二カチリナと
いふ大陸ヶ船を泊む
　　拠て海路を換れハ波ナ一月七九日我六月十六
　　日暑こハ和らと海路の日暦和蘭ニ写せる所
ハ和ハ南アメリカ洲中の一ツ也大陸とハ此地の城下も
二カチリナといふ
　　拠ユブラシリー（伯西児）明人（澤）の一港と又地名并長崎
　　通用ハ書上ケ　ブラシリーとハブラシリーの南ヶ
ある銀河（澤名）といふ川の海ヶ注ぐ和ヶシントカナリナと
いふ地ヶ見る〳〵
　　毎ヒ原図を熟覧するヶ伯西児（ブラシリ）の
　　名海ヶ船を泊めしヶ朱線を引き分ケ
〳〵和を見れハ其地の名ヶ記き「サンカテリニ」といふ名ニ「ニカラリ
ナ」と見る（澤）ハ此ハ海ヶ名ニ以南北ハ度の名ヶあり、
和蘭人刊行セ度数の表ヶハ北七度四十五分ヶ作ル　北蒲（ヒブ）涅兒（ヒル）獅
ス輿地の書ヶ「サンカタリナ」ハ伯西児の海岸ヶ属して赤道以
南北七度ヶあるに航海するを熟識する所ヶこれ欧羅巴洲ヶ
西方ヶ向ふ長途の日ヶ多ヶ海ヶ船さくヶ西て第次ヶ航中の
用を弁而後大南海ヶ向ふ海ヶ船ハ波ルトガル牡ル瓦ル尔人所領の地ヶ
　　伯西児（ブラシリ）の
此地ポルトガル　波ポルトガル牡瓦ル尔の領所と中ヶ港ハ大ひなれ
とも入海ヶて至て後く大船ハ着ケする能ハ

に入江に小河来流れ落ちると見也

湊の内はアンゲリ船武船和蘭武船数艘碇泊

を演ぶ之型国の石火矢を備へ居り土地の舟は細長く

して無甲板の如し底は九本二ツ割ふしらあく板を

打付ける故長サは江戸の猪牙舟ちらは短し

北面は平地高気酷熱此地にて冬雪といふものはなし

夏中何時も日に二三度づつ水に浴せり魯西亜人は毎

日厳寒よりも寒を寒(ファス)すといふもの水浴してもも

亞に比べこの地を為す者は毛織衣を為す故(カレコロモ)に暑

月には用ひぬと云なり

土人色黒ペテルブルカにて見る乞ボウハ出路ふ

又まらハ少し色黒し男女共に跣足(スアシ)にて素足

門中を為すかすりやうにて乞人比め(ヒメ)紀拳毛(チヘレケ)編

笠にて服は黒し女も色黒し貴く風呂先の猪板に

きしらめきを掛をあけ湯分下は水路又麻の織物にて

袴の裾を仕立ら拵ふ物を為用まるゆ魯西亜

の婦人は如一男女共に入浴ハ
小児も之を浴く九深なり男女共に裸ハ
松脂のかきものを腰に巻
山濠より江里船奥へ引けハ千形船の家形あり
石中京ハ上
信ーてるてら 氣造りハ瓦にて下をたたきあけ二天船ら
上ハ立石を以て是をあく屋根ハ板の皮を用ゆ

板にハ活字印あるーす

寺もあり オロシイアの寺は屋上より物ものめきす

文字の如を建てあり寺内ハ之すれ和の板子を
見ると我日本の人は和しーるこのあり

板にハ寺 ポルチエガルより迄る所ある
泥を以上信ーて水車にて米を舂すり不を見ら
家ハ石造り屋根ハ板のまを二ツ割ーて葺くを
くるをを見れハ屋のあり 水車ハ一ツにて三十六碓
つらすら 板に仕組ーるあり
はる果器 造 ポルキル 精米 シラゲ かーるを多く地

山ハ交易すとかゝり自出て米を買ふものを禁す
罔巻
尾巻を郡内ハ湯ノ島桃の如くかゝりて司也米ハ
多く用ひす他國へ出すをこゝとするよし尾巻我
部の物と同し猥ハ米地の物なり
唐巻ハ新く買入牛豚鶏鶩の鉏とするなり山ハ樹
木繁茂をこゝろ見る所ハ香樫樅孤ハ有なり絲
紡糸の方ハ大言山あり山頂ハ平く岩なられ故ハ
魯西亜人ハ山をこゝ見て考きなり

山ハ不ハ岸前洋中ハ立て墻をこゝめし石さゝふ高し
て城仕節等の仕ミ上陸ハ山ハて立木を買ふ市
帆柱を作れり仕をこて弱く世ハ帰さす
引き出ハ木ゝと漆ハて見ゝし上ハて堅木て
あきハ高きを不ハ立ゝ所ハ他人カラスナ
ゼリワトいふゝそハ高木といふる也
産物器ハ紙中ハ野ハ紙買入ゝ
茘　巢藏細ハ味ハ　蕪菁　冬瓜

西瓜　番南瓜　胡瓜　蒲萄

番椒　蜜柑　柚

胡桃　林檎　耳蕪

白沙糖

大ひるる丈寸程ゝ有り上皮剥きてこれを
殼面て四ちく人面のごとき形の内ゝ肉池一
ていゝあり耳きゝ殼の如し黒人ゝを異ゝ
入ゝて海を渉きまうり船人ゝ夢る様ゝ

これを買求め食するに口中清ゝく暫時気無と云
有よいかにもよく買ひ給へし
異国を問ひしに云れしと茂賀四ヶ浦
唐地なれて椰子なんを椰子蜜名コツコスといへりしやと問れハ唐人を
却てい不貴問て存出せり彼人茅コツコス
と呼て即を殼を水飲を作り糸やりをも
ゝ乾とい不他日をとられハ第一て椰子殼也

椰子の子 薩州 ゆゑ深富山深沢あり

せうそうのまとゐるコツコスと多く船へ買いれたり

藤枝 山土産なりときてしら不見

長めて房をなしたるものあり葉りて一叢をなし一弁

緑色一房三筋角之長サ弐寸あり初めは緑熟れ

肉黄色となる其内に一粒動て色又熟せり

始はめし房内色白く味甘きものあげひのもく仁子は 水通

なるしい叢こ三年房ゆくものは二三尺程なり其の実の

実りすくす器なるせい大抵花のかたち

一綿い山へも國まも種蒔す事六月種の本こ
草綿
ふも大あれとも綿の葉に毒ふすゆし
梅に木綿あるべし
一一異木葉赤く卵黄色の花もまたの花
秋へ開ひ生れり毛嵩に彩し日人こいひ
しいこれ紫檀ちうと
一魚いは足とんゆい蝦いあし
一豕いは牙はへて角指長し牛も因し
腴脂多へ狗り脂気多しとも魯西亜人
食ふ
一青色にて亀と家と赤くして色黒し義
きい鳥あり鳴聲いキウしとふ人
舌を出せい蔕をいて鳴あり名小雀
一甲の四角にて亀に似魚魚あり何とふ
しのようせを名いきりす河豚の肌に似あり

一猫ハ三毛なり我方のとのとに同しくして但乳つよき猫ハ多く碧色あり

一尾長猿あり 腹中へ買入飼置しに不日に斃(オチ)たり

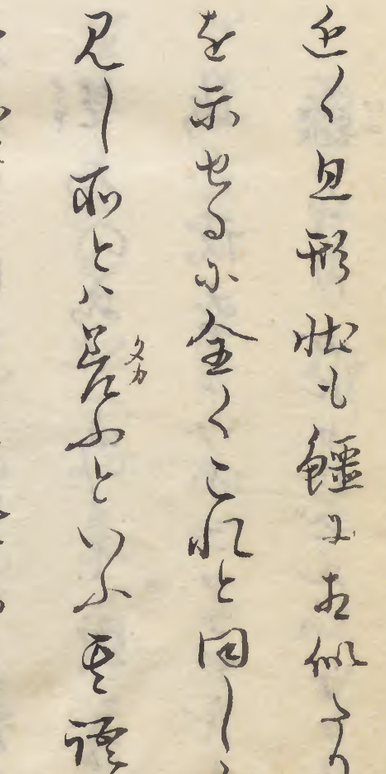
一毛嵐色にて洗白(シラシロ)喙長く尾毛ハ虎(トラ)斑(ブチ)丈五尺余り人に馴れ昌き獣を恐る悪臭あり是を四足買ふて腹中に畜置たり

以内を足ハカミシヤーツカ長崎の時買取

あゞたり 掛り三足ハ 胴中ニて 遠こ 鑿(オチ)り
一ガルカルゼルとゝふ 物のゝ子なりとゝふ 四鄉(ミツアシ)の
生きものを 胴へ 指糸 ゆり 其體の 長サ三四
尺 皮 厚く 色 黑く 鱗 深き 三ち 尾
ハ 棘(ゲ)あり 口のまへ あゞりてるゆ せすり
ハ 毒 蛇 せず 目 ハ 上ハ 微く 赤 の ゆく ある
ものあり 鄉(ミツアシ)ハ 三本 ありて 長サ 一すゆ ゆりる
毒 月上 病の ゆく ある 物 生 長 ゆれ ハ 西 角と

なり 山 ハ 海 ゆ 捕(ス)ミ 人 ハ も 取り 食ふと云
常ニ 画ニ 書 る 象 を ゆ ふ ゆ と 似 る
物 を 見 ゆ ハ 象 の ゆ ま と 物 ゆ 中 合 を
彼人 船 ゆ て 海へ 漬 け て 紙 ― 白 き 糸 を
つけ を 瞞 を 元 ゆり 目 ゆ ぬ き 玉 を 入 う へ
生(イキ)地 の ゆく ゆ て 野へ ゆり
物 ハ 海 ニ ゆ ふ コロコジル を 食 ゆ る
鱷(ワニ) ゆり ガルカルゼル ハ コロコジル ニ 者(カシ) ゆ

ガルカルゼル図



近く且形世も鍾馗に似たり和蘭写生器
を示せるか全くこれと同じくして少しく
異し而とハ呂ふといふ事確乎に就て器
を製するを尤也とせり
コロコジル 環蛇ふとあり

一は地にてあを買ふこゝハイシパンツケ（伊斯把你亜）
の名銀にて定ます
此布教日帰港に使用整ひ出帆の用意をなす
帰港の日数ハ隣に詳ます
十二月廿八日　エカテリナ出船
拝に海流地ハ彼聖和八百四年二月八日出帆
とゝゆこゝ我国年十二月二十七日ゴロ
漂流の暗礁と大抵合す此漂帰日七十一日也

山布を出帆南へ向ひ去りもるゝ是ハ島無裸数（ハダカ）
まて塩へうるかりしと是ハ南へ動る海上次第ニ高く
見ゆ山西ア墨利加大洲の西南北出嶮の海上
なりとゝふ布ゴロ島なりと船
中北人ゴロ問ハれハゴリノメスと云布ゴロて動て
意北所なり世海之ゴロ也一物へ向ハ又西
て暗礁多布向ふと浦れり此島より地方を
望ハ山中より火煙立升り不絶也上りて止す

栗ヨリ和蘭ヨリ ヒエールランド地 なり
此地ゝの山より吹来る風烈して寒しゝゝる故
船を海を出すること能はず 十二月に成ると
流れ氷日々切り来る 翌年三月に成ると
雪降りて寒気も強し 船中の人殊に外へ痛
の極なり 何故ゝゝ安しまるといひ居れども
いよゝゝ南へ流れ出れば七十度已上の海上なる海
氷是迄和蘭人の所為なりと

七十度とゝふ事を彼ハセイムテサツ度がラトと
いひゝと南方も北極下と同しゝゝ極下ゝ
近きれいかくあるゝ也 掃部察鑑版の世界
図ヨハ南極下も氷海界限の図あり 家和
漂客の書を出版しサンパミヤウを動とせし
時なり 家して氷海へ入りしハ北極下ヨ近
き七十度前なるなりと見くらう漂客書
南北極下ヨ迄き海を海を海を探を寒気ゝゝハ

未曾有なる奇中北斉といふ道し天南
亜墨利加洲の狹長なる熱帯冷帯よりか、
きるの大洲なり
七十度前後をハ通航もなれたれとも
なるめ也といふは此人よりしかくの発端程方
なし新くハ西風なれとも吹船ハ ドーブラ ナデジタ
の方へ船ありたきと念せしこ
抑も彼亜板の世界図ハ亜弗利加洲のカー

ブデグーデホープ 和蘭名にして明人所譯喜望峯也 の所なり此
名ありこれ右大洲の岬かして和蘭の領
而こ北へ出るへき船そなうる事へ出ん事を
新西ハ事ハ発端にて色しるとこの世界ハ
彼岸とする内風吹船ハ碧吹風なり ゴリノメスを
出り北の方へ向て走りそれハ既に暗せしこと
漸く暖気の海にとなまり
海中ハ澄水清而うるわしく見る所を通りしるの

ありしかと思ふことならぬ海とありしかもと思えすう

マルケイサとの海路日記

彼一千八百五年二月八日 アメリカ出帆 我寛十二月廿七日 彼二月九日 我十二月廿八日

彼二月十日 〃 日 廿九日 彼 日十一日 我甲子正月一日

原文ヲ正カテリサを出帆三日目記ノして正月二日

彼二月十二日 我甲子正月二日 彼二月十三日 我正月三日

彼二月十四日 我正月四日

彼二月十五日分我正月十四日迄日並合す

我正月四日分日十四日迄の分一日廿里程高緯

彼二月十五日分正月十六日迄日並合す

彼二月廿九日 寛正月十九日

間氏曰ハ廿九日の和上平の記号(シルシ)ありまいハ

ハ年の二月閏日の記號(シルシ)とせしとハ西洋西

ヨて二月ハ名をへボラレ」といふ 二月ハ例年廿八日

なり四年めの二月

を廿九日とすこれ閏日なり閏年日二月ハ廿八日ある年と廿九日

ある年と交番しいこと毎の月ハ廿日今の新ヨ載す

閏ハエラ」といふ字ニ〜てへボテレと配言する

首字なれハけ字を以て間日の記号とすと云ふ

彼 三月一日　我 正月廿九日　彼 二百　永 五月廿一日

彼 三月 三百より我 正月 三十日と日並合す

彼 三月十二日　我 二月朔日　彼 三月十三日　我 二月二日

彼 三月十四日　我 二百 三百より彼 三百廿九日我 二百十八日

と日並合す　我 二百五日分四十八日とゴリノメス

又乃切り取る内とゝ云へとも海路記を見るに一日ハ

里程太性共性玉て短一日数十四里共云と云ふ

十八日より十九日の乃ハ里数和て紫凡を以て

云へとも

彼 三月三十日　永 二月十九日　彼 三月廿百　我 二月廿日

彼 四月一日　永 二月廿一日　彼 四日二百　永 二百廿百

彼 四月三日　我 二月廿三百より彼四月八日我二百廿八日

まて日並合す

我十八日ハ廿八日まて十日の乃も赤乃切り取て

日を積より孫子なりより五カテリナを爲して此所

まて六十二日を經しと見る以方七十度の海面
を走りメヒウとんなせ一帯と思ふる北八りかを
暴風を切る岬を乗り過し北へ向ふと見こうう

彼四月九日　我二月廿九日　彼四月廿日　我三月一日

彼四月十一日より三十日迄我日並に合す　彼四月三十日　我
三月廿一日より合すあるう

彼五月朔日　我三月廿二日

向氏曰彼五月を二アイとふまるMの
紀号あり　MAN の首字なり此紀号八海抵
日廣北一帯とす一以而亜墨利加の西海と
為すある二月冒日の紀號を以て海路の日
廣を推測するの證據とするなりと

彼五月二日より八りを我日並に合し彼五月廿八
我三月廿九りあり

彼五月九日　我三月三十日　彼五月十日　我四月一日
〃　十一日　〃　四月二日　〃　十二日　〃　三日

此後彼五月廿三日 我巳月十巳日迄日逆合す

環海實學雲之十二終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan